

# 序

敗血症は現在でも頻度が高く、また死亡率も高い病態である。Surviving Sepsis Campaignが行われ、9月13日がworld sepsis dayと設定されるなど世界中で敗血症の死亡率を下げる取り組みが行われている。しかしながら、近年sepsisの治療薬として開発されてきたものは悉く臨床治験で有効性を示せず、有用性が明確に示された治療法も非常に限られている。

一方、国際的に使用されているSurviving Sepsis Campaign Guidelinesと日本版ガイドラインの対比でも明らかのように、日本でのみ行われている治療法が多数存在し、世界標準とは大きくかけ離れている。この現状を十分認識し、それらを盲目的に使用することは避けなければならない。敗血症は原因疾患が多彩で、一種の症候群であり、病態によっては特殊な治療法が有用であるかもしれない。しかし、その病態を認識する術はまだ確立されていない。

明白なことは、有効性が明らかな診断や治療をしっかりと実践していくことである。瀕死の患者を前にしても、今行っている確かな治療に自信をもって、有効性が定かではない治療を行わず、見守ることができることこそプロフェッショナルだ。藁にでもすがるように、有効性が明確でない治療法を次から次と試すのではなく、現在、有効性が定かではない治療は行わないという確固たる信念が必要である。

本書では、敗血症診療で悩んだり困ったりすることが多い事項に特に焦点をあて、各分野の専門家に、臨床でのポイントとコツを解説いただいた。明日からの診療の傍らにおいて実際に活用いただけるものと自負している。

一方、現在はここまでしか敗血症診療は確立していないことを認識して、今後、質の高い研究を日本で実施し、日本人での知見に基づいたより良い診療が実施できるように繋げていただきたい。

2014年1月

真弓俊彦